

お陰様で日本ライフ株式会社は設立 41 年を迎えました。皆様に心より感謝申し上げます。

さんけん

2016 No.56

平成 28 年 1 月 1 日発行

ネットワークニュース

発行人：三健ネット会会長 門馬 義芳 日本ライフ株式会社社長 門馬義幸

三健ネット会事務局 日本ライフ株式会社 東京都狛江市東野川 1-34-14

TEL03-3488-8700 FAX03-3488-9921 <http://www/nihonlife.co.jp/> Eメール: mail@nihonlife.co.jp

三健（さんけん）とは健士・健食・健民

三健ネット会は、人間の幸せは健康にありとの考えから、人みな健康で豊かであることを願い、「健康な土から健康な食物を、それを食して心身ともに健全な国民をつくる」を基本理念にしています。この理念を広く皆様にご提唱し、ご理解とご協力をいただき、普及によって健康と健全な社会、地球にやさしい環境づくりに貢献していきたいと願っております。

TPP問題と食料自給率

さんけんネット会事務局 門馬義幸

新年明けまして おめでとうございます

今年もよろしく願いいたします。

昨年はTPP問題に明け暮れた年でした。交渉の結果は大部分の農家の期待を裏切るものでした。

以前からこのような決着になることを予想していた農業人もいました。戦後から現在までを振り返ってみて、日本はアメリカの意向にそって政策を進めてきたからです。今までの農業のやり方は通用しなくなる。時代に合う農業でな

ければ、生き残っていけないのではないかと危機感を持つ方も多いと思います。政府が約束している国内農業の体質強化策を待っている時間はないかもしれません。

年頭にあたり、時代に合う農業とは何かを主食の米で考えてみます。美味しい米づくりをしている農家では独自のやり方で土づくりに時間をかけています。一例をあげれば、収穫後に稲わらと米ぬか、それに「アーゼロン・C」や「稲田の守」を反当り 40~60 kgを撒いて耕します。有機物を土中に漉き込むことで、微生物とミミズなどの土壌生物が増え、彼らの働きで春までに



土づくりがゆっくりと進んでいきます。NHKの番組「サラメシ」(2015年10月19日放送)のエンディングで俳優の中井貴一氏が「毎日、仁多米を食べている中井貴一でした。」と締めくくったのにはびっくりしました。仁多米(にたまい)とは島根県仁多郡奥出雲町で収穫されるコシヒカリの産地ブランドですが、この地方では堆肥投入によって、有機質豊富な土づくりが行われているそうです。

コメ離れが進んでいます。消費者に訴えるために、「魚沼産コシヒカリ」に追いつけ、追い越せと各地で米のブランド化が進んでいます。多くの銘柄が日本各地で出ていますが、青森県が昨年10月にデビューさせた「晴天の霹靂(へきれき)」の商品名にはさすがに驚きました。丹精込めた土づくりをしたお米は銘柄に関係なく、本当に美味しいです。だからこそ、美味しいお米は地域や銘柄、生産者などを具体的に消費者に伝えることも必要なのではないでしょうか。「おいしい米だから売れるはず」では、販路の開拓は



むずかしいかもしれません。米という字は、米を作るには八十八回の世話をする必要があり



ことに由来していると言われています。ある米づくりの名人は「毎日、田んぼを見ている。」と答えていました。安全で、安心して食べられる美味しいお米ならば今後も国内外で生き残っていると思います。さらにブレンドド・ウィスキーのような各地の米を混ぜ合わせたブレンド米も需要が増すかもしれません。

ブランド化戦略が進んでいる一方で、一昨年の米価下落により、多くの農家が米作りをやめました。儲けがでないどころか、赤字になったからです。収穫後、農地をそのままにしている農家も多いのが実情です。農家の高齢化や資材の高騰もあり、土づくりにまで手が回らないからです。お茶碗1杯のご飯が20円という時代になりました。農家の手間暇を考えない価格です。

生産者、販売者、JA関係者、農政に関わっている人たちが、米づくりは環境保全に大きく貢献していることも、もっと消費者に訴えるべきだと思います。食料がなければ、人間は生きていくことができません。食料自給率は主要先進国の中では日本は最低です。異常気象による農作物の被害が世界各地で起きています。日本で

も昨年は豪雨による被害が多発しました。政府はいざという時のために備えて、備蓄を含めて、食料を確保する責任があります。国土の狭い日本なのに、農耕放棄地は年々増え、現在では国内の農地全体の1割、滋賀県に匹敵する約40万ヘクタールまで拡大しています。世界の人口は増え続けています。1分間に137人、1日で20万人、1年で7000万人増えていると言われています。今や73億人に達しようとしているのです。食料不足になったら、今までのように他国から輸入できるわけがありません。いざという時に飢えることなく、国民が安心して暮らせる農業政策を切に望みます。そのためにも、食料自給率を先進諸国なみに上げる必要があるのではないのでしょうか。

微生物の力

大村智北里大学特別栄誉教授が昨年10月5日にノーベル賞(医学・生理学賞)を受賞しました。受賞理由はオンコセルカ症の特効薬「イベルメクチン」の発見と開発によるものです。

このイベルメクチンの元となる放線菌は静岡県の川奈ゴルフ場で採取されました。大村教授はポリ袋をいつも持ち歩き、各地の土の中の微

生物を集め、その中から有益菌を探し出して培養するという作業を続けています。受賞の記者会見で次のように述べています。

「・・・私の仕事は微生物の力を借りているだけのもので、私自身がえらいものを考えたり、難しいことをやったりしたわけじゃなくて、全て微生物がやっている仕事を勉強させていただいたりしながら、今日まで来ているというふうに思います。・・・私自身は正直言って本当に、微生物がやってくれた仕事を、私はそれを整理したようなもんですから、そういうのは仕事でない。・・・日本っていうのは微生物をうまく使いこなして今日まで来ている歴史がありますので、そういうのを大事にしております。食糧にしても、農業生産にしましても、われわれの先輩たちは本当によく微生物の性質をよく知って、そして人のために、世の中のためにという姿勢でずっと来ている、そういう伝統があると思うんですね。そういう中の一環、ほんの一環として私が存在するというふうに思っているんです。・・・人のために少しでもなんか役に立つことないかな、微生物の力を借りてなんかできないか。これ



を絶えず考えております。」(下線は筆者)

土壌微生物や腸内細菌をはじめ、微生物が脚光を浴びています。食生活を考えただけでも、納豆、味噌、醤油、酢、漬物、ヨーグルト、パンの生地、日本酒、焼酎、ビール、ワインなど微生物を利用した食品をいくらでもあげることができます。大村教授が「日本は微生物をうまく使いこなして、今日まできた歴史がある」と述べている通りです。私たちの祖先は微生物の存在は認識していなかったと思いますが、長年の経験と知恵から微生物の力を利用してきました。微生物の研究は飛躍的に進んでいます。微生物同士がお互いに交信しているであろうことも確認されています。今後、どのようなことが明らかになっ

ていくのでしょうか。微生物が地球を救う一助になることは間違いありません。



ミミズの働き

ミミズほど外見で損をしている生物は多くありません。特に農業に従事していない女性にとっては、気味の悪い存在として忌み嫌われてい

ます。山歩きをしていると、足音に驚くせいでしょうか。突然 20~30 cmの巨大ミミズが現れて、叫び声をあげる人もいるくらいです。

ところが、このミミズは土壌にとって、なくてはならない存在です。ミミズの



働きについてはアリストテレス(BC. 330 頃)やチャールズ・ダーウィン(1809~82)も認識していました。アリストテレスはミミズを「大地の腸」と言い、ダーウィンは「人間が耕すよりも前からミミズによって、土は掘り返されてきたのだ。」と述べています。

現代農業(2004年8月号)の特集「ミミズはすごい」によると、ミミズには以下の5つの働きがあります。

- ① 食べる・・・有機物と土の分解
- ② 糞をする・・・肥料供給、物理性改善他
- ③ 粘液(尿)を出す・・・肥料供給、殺菌作用他
- ④ 動き回る・・・孔をあける、土を耕す、肥料や菌を根のそばに移動する

⑤ 死亡する・・・死骸は最高の即効性肥料になる



海外では2～3 m
に達するミミズもい
ますが、国内で一番

長いミミズはどのくらいの長さがあるのでしょうか。日本最長のミミズはハッタミミズで、90 cmを超えるものもいるのです。石川県、福井県、滋賀県でしか見られない日本の固有種です。石川県の八田村（現・石川県金沢市八田町）で昭和5年に見つかったことからこの名前がつけました。

琵琶湖博物館はこのミミズへの関心を深めてもらおうと、平成25年6月～平成26年5月まで、「ハッタミミズダービー」を開催しました。草津市で記録された80 cmのミミズが優勝しました。この大会を知った河北潟湖沼研究所（石川県河北郡）が、平成26年10月1日に琵琶湖博物館に挑戦状を送り、「琵琶湖に負けるなハッタミミズ本家の意地を見せるぞコンテスト」を10月19日に開催しました。残念ながら、記録は75 cmで、5 cm及ばず、返り討ちにあってしまいました。この悔しさをバネに、研究所は博物館に再挑戦状を送り、博物館側が受諾したことから「全国ハッタミミズダービー」が平成27年5月1日～11月30日まで開催されました。

今回優勝したのは、全長85 cmのハッタミミズ

で2015年6月15日に滋賀県甲賀市水口町松尾で採取されたものです。ちなみに日本記録は92 cmとのことです。

会員の声

4年続けて富有柿を 収穫することができました

柿は「なり年」と「不なり年」が交互に来ることが知られています。昨年の『さんけんネットワークニュース』（2015 No. 53）では、3年続けて収穫できたことを報告させていただきました。この年は「なり年」で、害虫の害も受けず、それまでにないほどたくさんの柿を収穫することができました。収穫後、毎年、お礼肥として、木から1メートルほど離れたところに穴（直径30cm、深さ30cm）を掘り、アーゼロン・C 10 kgと生ごみと落ち葉から作った堆肥を入れて混ぜ合わせます。さらに木の周りにもアーゼロン・Cを5 kg撒いて、その上に土をかぶせます。いつ行っても木の周りはフカフカしており、長靴が土の中にめり込んでしまいます。

今回は「不なり年」の上、夏に発生した害虫（アメリカヒロシトリとイラガ）に柿の葉の多

くが食べられてしまいました。それでも、前年の約半分の収穫がありました。半分と言っても食べきれない程の量で、友人・知人に食べてもらいました。最近は、天候の影響でしょうか。夏にアメリカヒロシトリやイラガが大発生することもあります。今年も収穫後にお礼肥を撒きました。来年の収穫も楽しみです。（富山県 Yさん）



鏡餅の意味

アーゼロン・Cを使って家庭菜園を始めて、5年目に突入しました。味が飽きないよう色々と工夫しているつもりですが、家族からは「また？」と言われることもあります。

でも、四季や旬の大切さを知りました。そのせいか、季節の行事が気になるようになりました。お恥ずかしいことですが、正月飾りは年神様をお迎えするためのものとは知っていたのですが、

娘に「どうして、飾り餅ではなく鏡餅っていうの？」と聞かれ、わかりませんでした。

夕食時に娘から調べた鏡餅の話を聞きました。由来は「銅鏡」の形に似ているからで、「鑑みるもち」が変化したもの。丸い形は「夫婦円満」、2枚重ねるのは「1年めでたく積み重ねる」意味。みかんは橙色だから「代々続き栄えますように」、「木から落ちずに、大きく育ちますように」の意味が込められているそうです。娘は「年越しそばやおせちもそうだけれど、昔からのことには一つ一つ意味があるんだね」というので、「そうだね。意味があるから昔から伝えられてきたんだよ。」などと会話が弾みました。

娘がちょっとしたきっかけで、日本の伝統に興味を持ったこともうれしかったのですが、難しい年頃の娘と話を

しながら食事ができたことが何よりうれしかったです。



（静岡県Kさん）

編集後記

今回初めてハッタミミズの存在を知りました。昔は1メートルを超える大物もいたそうです。石川県では「丸田ミミズ」の歌もあります。面白い歌です。一度聞いてみてください。ミミズの働きを多くの人に知ってもらいたいです。

(Y. M)

去年を「一文字で表すとしたら、私の場合「喜」です。ダンスで成功したら喜び、失敗したら笑ってごまかす。何事も明るく笑って今年もがんばります！本年もよろしくお願いいたします。

Y. O

帰り道を裏道に変えたら、真っ暗の中、ひととき豪華なイルミネーションを点灯しているおうちを見つけた。初めはびっくりしましたが、今は、今日も無事帰ってきた心が休まります。

K. I

